

あとがき

昭和40年に、病院で出産する数と自宅で出産する数がほぼ同じになった。その後、ほとんどの病院で出産するようになっていく。今からちょうど50年ほど前の話である。女性は、お産は、棺桶に片足を突っ込んでするものと覚悟をもって臨んだ。今のようにほとんどの赤ちゃんが無事に産まれてくる時代ではなかった。人には寿命があり、無事に生まれなかったのは寿命なのだ諦めた。現代は、病院に行けば安全に出産ができると思いこんでいる節が感じられる。しかし、現代の女性は、自然に出産ができることが減少していると報告がある。生活が便利になって、身体を動かすことが減り、スーパーには栄養価の少ない食品が並び、ストレスと睡眠不足で、自ずと体力がなくなっている。これでは、自然な出産ができないのも納得がいく。さらに、出産後にも支障をきたしている。

一方、死ぬこともまた、病院の中のことになってしまっている。昔は、自宅でおじいちゃん、おばあちゃんは少しずつ衰弱していった。だんだん食べれなくなり、いわゆる骨と皮になっていった。しかし、病院の中では、高齢になっても手術が勧められる。延命措置が行われ、食べられなくなったら血管から、高カロリーの点滴が入れられる。自分で身動きができなくなり、時間で看護者による体位交換が行われる。体位交換のために身体の下に入れられた手の形がくつきりと残る。骨と皮どころではない。

生まれてくるのも死んで行くのも、病院の中でいいのだろうか。身近に生と死があって、先に生まれたものの死に様をみた。それを見て、後に生まれたものは学習をし、「養生」をしなければと思ったに違いない。現代では、臨床で健康のためにと希望した患者に、お灸のセルフケアを説明しても、こちらの説明力不足なのか、それとも忙しいからか、自ら希望したにも関わらず、なかなか継続して行く患者は少ない。

1年前に各講師の先生の話の伺い、今回、再度編集の際に、原稿を拝読させていただいた。編集しながら思ったことは、世界や政治、大きなことまでは思いは及ばないが、せめて自分の身体は自分で守ろうと思うことが養生の第一歩ではないかと思った。病院嫌いな私は病院に行きたくないのに、病気になったらどうするのかその時でないかと答えがでない。しかし、自然(寿命)に任せて人生を、死を受け入れていく覚悟をしたいと思った。死に方は生き方だと言われる。自分らしいと思える最後にしたいと思う。

(前田 尚子)



第9回 社会鍼灸学研究会 集合写真 (2014年9月14日)

社会鍼灸学研究会 2014 (通巻9号)

発行日 2015年9月12日

編集・発行 社会鍼灸学研究会

〒305-8531 茨城県つくば市春日 4-12-7

筑波技術大学保健科学部

形井研究室

Tel&Fax 029-858-9533

e-mail: katai@k.tsukuba-tech.ac.jp

表紙・題字 掘紀子 (瑞雪)
